沖縄の念仏歌とチョンダラー

――アンガマーと島エイサー――

坂本　要

一　概略と従来説

沖縄の盆踊りとしてエイサーが有名である。大太鼓やパーランクーを手に隊列を組んでエイサーの掛け声で踊る「エイサー」は沖縄の芸能を代表するひとつとなっている。

この太鼓エイサーの踊り方は先島を含め沖縄全体に広まっているが、歴史は新しい。一九一九（大正八）年宜野湾市の愛知地区で北谷村（現嘉手納市）千原のエイサーを元に空手の振りを入れて勇壮に踊ったのが始めと言われる。[1] それが沖縄本島で広まったのは、一九五六（昭和三一）年のコザ市（現沖縄市）で開かれた全島エイサー・コンクールの開催からと言われている。[2] それまでは沖縄各地区で手踊りのエイサーが踊られていた。踊りは円を描く輪踊りである。

これは太鼓エイサーに対して手踊りエイサーとか島エイサーといわれるもので、古い形のエイサーである。エイサーは盆の七月（沖縄では旧暦の七月）に踊られるものであるが、沖縄本島北部では盆明けに踊られる七月モーイ（舞）や七月ディ（手）を女エイサーともいう。

またエイサーの元は念仏踊りであると言われ、まず踊りの始めは念仏歌で踊られる。沖縄本島北部では念仏歌の部分が残っているところもあるが、消えてしまったところが多い。石垣島などの先島では念仏歌が歌われるのは、アンガマーと言われる盆の踊りで「親の御恩」や「継母念仏」「孝行念仏」の歌である。アンガマーは仮面を付けるといわれるが、一様ではない。

これらの島エイサーとアンガマーを念仏歌の踊りとして、八重山地区と本島北部の事例を含めて考えてみたい。

エイサーについては従来からの説として以下のような説が論じられている。

まず「エイサー」の語については「おもろさうし」第十四の「いろいろのゑさおもろ御さうし」の「ゑさ」が元であるという説である。第十三の「船ゑとおもろ御さうし」の「ゑ」が掛け声を表すのと同様に第十四の「ゑさ」も掛け声で、「いろいろのゑさおもろ」は「特殊おもろ」に分類され、村々の人物や事件をあつかった歌で、掛け声とともに集団舞踊であることが推定できるとされ、「エイサー」の先行形態とされる。伊波普猷・矢野輝雄・外間守善がこの説である。[3]

一方、知名定寛・酒井卯作はこれに疑義を呈している。知名定寛は新聞記事から明治三十年ころは「エイサー」は「似せ念仏」と言われていたこと、[4]酒井卯作は明治以前には「似せ念仏」「那覇の躍り」「躍り芸者」「踊り狂言」「躍り念仏」と文献に記されており、盆の踊りを「エイサー」とは言わなかったのではないかとしている。[5]

さらに諸文献の出てくる「似せ念仏」については「似せ」は青年を表す「二才」の事で「若者の念仏」であるという矢野輝雄説に対して、知名定寛・酒井卯作はこれにも疑義を呈している。沖縄に念仏信仰を伝えたのは袋中上人（一五五二・天文二年～一六三九・寛永十六年）とされるが、『琉球国由来記』巻四に「仏教文句ヲ、俗ニヤワ

ラゲテ　始メテ那覇ノ人民ニ伝フ。是念仏ノ始也」とある。このことから、現在アンガマーや島エイサーで歌われる「親のご恩」「無蔵念仏」「継母念仏」等の歌念仏を「和らげた念仏」「念仏に似せた念仏」即ち「似せ念仏」であると解釈している。[6]

沖縄ではこの念仏信仰の布教に念仏者（ニンブチャー）や京太郎（チャンダラー）の名が挙げられ、この両者については多くの論があるので、既論に譲るが、沖縄本島北部の島エイサーや七月モーイで歌われるのは「仲順ながれ」や「久高まんじゅう」は京太郎の歌や劇に関連しているもの[7]が多い。

以上の論を踏まえて、現状の具体例から見ていこう。扱うのは先島のアンガマーと沖縄本島北部（名護市・本部町・国頭村の島エイサー・七月モーイ）である。

二　アンガマー

アンガマーは折口信夫が一九二三（大正十二）年第二回の沖縄調査で石垣市登野城のアンガマーを見て深く感動し、彼の「まれびと」という概念の生成に多大な影響を与えた。それは一九二九（昭和四）年の「国文学の発生（第三稿）まれびとの意義」[8]にまとめられ折口学の根幹となった。そこではアンガマーは「祖霊の群行」として書かれている。異郷（常世）から来るまれびと（客神）として扱っている。

アンガマーとは何を指すのか明確ではない。登野城のようにウシュマイ（翁）とンメー（媼）が出てきて座敷で踊るのは士族のアンガマーで、他の島では異なる。西表島の祖納では座敷と庭で別に踊り、庭で踊るのは仮面や顔を隠す踊りでこれをアンガマーといっている。竹富島では顔を手拭いで隠し庭で踊る踊りをアンガマー踊りといって仮面はつけない。小浜島では入場の時の輪踊りをアンガマーブンドゥル（踊り）という一方、顔を隠して踊る女

子のことをアンガマーともいう。

アンガマーは実は盆だけでなく、家の新築の萱上げや屋移りの踊りもアンガマー踊りといい、普通の女性が踊る。西表島の祖納の節祭にも出てくるアンガマーは黒づくめのフダチミという女性のあとにつく女性の踊りをアンガマーもしくはアンガーという。そのあとの男の輪踊りを男のアンガーという。女性のアンガーで歌われる「五尺手拭」は本土で元禄時代頃に流行った風流踊り歌の歌詞である。アンガーは語源からは母もしくは姉をさすとされる。これらのことからアンガマーは女性の風流踊りをさすという説もある。(9) このようにアンガマーは盆アンガマーだけではないが、ここでは念仏歌を伴う盆アンガマーを扱う。

1　石垣市登野城（とのしろ）

石垣市登野城のアンガマーは折口信夫の報告もあり、有名である。ウシュマイ（翁）とンメー（媼）が爺婆の面を被り、アンガマーを従えて、室内に上がり仏壇の前での踊りと滑稽な珍問奇答を参列者とやりとりする。アンガマーはウシュマイとンメーの子供とされ十人ほど連れている。盆の十三日から十五日にかけて新盆の家を回る。

まずウシュマイとンメーが仏壇に口上を述べ、座開きに「無蔵念仏」で踊る。その後アンガマーが次々と踊りをソーロン（新精霊）に披露する。

アンガマーは紙花をつけたクバ笠を被り、手拭いで頬被りをしている。顔がわからないように手拭いで隠し黒メガネをかけて、肌を出さないように手甲をはめている。主に高校生の男女がその役にあたる。踊りは「バシヌブシ（鷲の鳥節）」「マミドゥーマ」「めでた節」など豊年祭に踊られる歌が多い。その合間に珍問奇答がある。弔問者からの質問に裏声で答える。質問者も裏声である。例えば「盆提灯はなぜ回る。電気で回ってグショー（後生）とこの世の行き来を表す」というようなやり取りがあり笑いを誘う。再び何番かの踊りが披露され家を出て、次の家に

行く。昔の仮面はアダンの葉のようなものであったともいうが、翁と媼の仮面は一八四四年（道光二四年）から使われたという。

（二〇〇二年調査）

2　竹富島

竹富島では盆の十三日から十五日にショーロ（精霊）祭りが行われ、婦人会や若者がアンガマーとなって家々を訪れる。その場合歌われる念仏歌は十三日の迎え日に「孝行念仏」、十四日の中日は「無蔵念仏」と「七月念仏」、十五日の送りの日は「園山念仏（大和のやまさじ）」と決まっている。この念仏は地謡が室内の仏壇の脇で三線（さんしん）で歌う。

婦人会のアンガマーは白布で頬被りをしてクバ笠か花笠を目深に被り、誰かわからないようにする。仮面を被ったりはしない。庭に列を作って入ってきて大きな円を描き左手を腰に、右手に団扇を掲げて念仏歌に合わせて踊る。裸足である。[10]その後は仏壇に向かって列を組み、何番かの奉納舞踊を行う。

それとは別に有志の青年が様々な仮装して家々を回る。調査時は半裸の青年が造り物の船で庭に入場し、ダイバーの恰好で魚をモリで捕るまねを三線にあわせて面白おかしく演じていた。

（二〇〇三年調査）

3　小浜島

小浜島は石垣島と西表島の間にある。ここのソーランブンドゥル（精霊盆踊り）は複雑でアンガマー踊り以外にもいろいろな踊りがあり、儀礼も精霊迎え・送りの他に「ドゥハンダニンガイ（健康願い）」や「中道の儀式」がある。念仏歌も多い。

盆は旧七月七日の「ナンカソーラ（七日精霊）」から始まる。この日からニンブチャニンズ（念仏者人衆）の練習がある。小浜島の村は中道を境に南と北に分かれ、それぞれにニンブチャニンズがいる。ニンブチャニンズは地

謡、ナカキタ（中堅）、アンガマーからなる数十名の集団である。衣装は十三日・十四日と十五日では異なる。十三日・十四日はコーシーサン（格子柄）、十五日は黄色地のバサキイン（芭蕉着）で、十四日の深夜十二時を境に鉢巻きが白から赤色に変わる。笠は被らない。

十三日から南北に分かれて各家をまわる。地謡を先頭に庭に入って円を描く。部落会長・公民館長が座敷にあがり仏壇の線香をあげ挨拶をする。庭では地謡が莫蓙やビニールシートに座り、ニンブチャニンズは念仏歌に合わせて回り、順次座る。この踊りをアンガマーブンドゥルともいう。

念仏歌は十三日部落会長の家では「無蔵念仏」他は「七月念仏」で、十四日は「無蔵念仏」に変わる。踊りは「ハナブンドゥル（花踊）」「アプリブンドゥル（扇踊り）」「シッチャーブンドゥル（手踊り）」「カッツァンブンドゥル（笠踊り）」「ボーヤンブンドゥル（棒踊り）」があった。「ボーヤンブンドゥル」は棒の先に銭が付いていて庭に入る時棒を振って鳴らしたという。念仏のあとは「かぎやで節」他、豊年祭で踊られるような、いろいろな奉納踊りが座っているニンブチャニンズの前で披露される。調査時は余興に「お富さん」「勘太郎月夜」を三線で奏でて踊った。

途中からアンガマーが登場し、面白おかしく踊る、アンガマーは笠や帽子を深く被り、頬被りをして、肌を見せないような着物を着ている。調査時は女子がアンガマーになり「めだかの学校」「鳩ポッポ」「お母さん」などの童謡を三線に合わせて踊って喝采を浴びていた。

十三日・十四日・十五日の深夜十一時まで各家二十分程度で回る。

十一時を過ぎると一旦家に戻り、ソーロン（精霊）を送ったあと、午前一時に着物をバサキインに着替え赤鉢巻きで「ドゥハンダニンガイ」をする。念仏は「ヤマトゥヌヤマサジ（大和の山さじ）」で、「山さじ」は「山伏」の

事とされる。庭に円を描いて入り座って念仏歌を歌うのは同じである。アンガマーも登場する。概してめでた歌が多い。

明け方五時に中道（なかみち）で、花笠を被り女装した男子が南北から中道の儀礼に集まり、北村がジルク（十六日）の「ヤマトゥヌヤマサジ」を歌い、南村が「ミンマン経文」の念仏でミンマンブンドゥル（ミンマン踊り）を踊る。「ミンマン経文」は浄土宗の二河白道の儀礼を内容としたものである。このあと南北の労をねぎらったあと、再び「ドゥハンダニンガイ」を年長者の家を夕方まで回る。「ミンマン」は「弥陀」の意味か。

道行には「イランゾーサ（別れの歌）」を歌う。夕方には広い庭の家で「ヤラマール」「マカショ」の巻き踊りをする。「ヤラマール」は柔らかい風にのって恋が開くという歌で、「マカショ」はマカショという女の子の褒め歌である。「ヤラマール」は反時計まわりに廻り、「マカショ」では二重の輪になる。[11]

（二〇〇二年調査）

4　黒島

黒島は石垣島と西表島の中間にあり、小浜島の南の島である。盆の十三日から十五日にかけてソーロン（精霊）踊りがある。男女の若者がニンブチャーとして位牌のある家を回る。十三日は「七月念仏」・十四日は「無蔵念仏」で踊る。十五日は「コーフダイ念仏（孝不題）」を歌うだけで踊りはない。「コウフダイ念仏」は不孝の唄と孝行の唄がある。昔は三線はなく鉦のみであった。衣装は黄色の芭蕉着に紙花をつけた笠を被り、頬被りをしている。チョンダラー（京太郎）が二人酒壺を担いでいくが、まずチョンダラーが家の者に挨拶をして、ニンブチャーが輪になり念仏歌で踊る。その後正面を向いて「上り口説き」を踊って終わる。

三十三年忌のある家では「アゲ焼香」「ウフ焼香（大焼香）」が盛大に行われる。庭先にホカタナ（外棚）を建てて、座敷で「コーフダイ念仏」を歌い、庭でアンガマー踊りをする。アンガマー踊りは女の人がクバ団扇を持ち、

裏声のアンガマグエ（声）で「ヒヤルガユイサーユイサー」の掛け声で輪になって踊る。アンガマーは庭にいて物乞いをするといわれている。

（二〇〇四年調査）

5　西表島祖納（そない）

祖納は西表島の北東部にあり、節祭（シチ）で有名である。盆の旧七月十三日から十六日にかけてソーロン（精霊）アンガマーがある。高校生を中心に青年会がアンガマーになり初盆の家を廻る。公民館を出発し三線を奏でながら、道行をして新盆の家に行く。三線（地謡）と踊り手は座敷に上がり、仏壇を拝す。鉦の代わりに焼夷弾の薬莢で調子をとっている。

この室内踊りはサンマイといい、白襦袢・白掛裳（かかん）で色物手拭の頭被り・五尺手拭の襷（たすき）姿の女子二人が仏壇に向かって踊る。一番踊りは「ゴジンフ（御前風）」で、めでたい席で歌われる歌である。次に「ニンブチー（念仏歌―無蔵念仏）」で「親の御恩は深きもの……」を八番まで歌い休みに入り、刺身・酒の接待を受ける。

庭では七、八人のアンガマーがクバの笠を被り、頬被りをして、クバの団扇をかざしながら輪踊りをする。仏面を付けている者もいる。仏面は狐や爺婆（ウシュマイとンマー）など思い思いで、誰か分からないようにする。アンガマーは「ヒヤルガユィサーユィサー・フゥフイ」という裏声の奇声を発しながら踊る。この裏声は「アンガマムニ」と言い、アンガマー独特のもので、休み時の会話も「アンガマムニ」でしゃべる。アンガマーがこの世のものではないからという。

一休みの後はめでたい席となり「祖納岳節」「イリアラ（西表）口説き」「高那節」「繁盛節」「マルマボンサン（坊さん）」と続き、途中からアンガマーも座敷に上がり遺族ともどもカチャーシーで祝う。最後に「ニンブチー（無蔵念仏）」の後半で踊り収め、次の家に向かう。

（二〇〇三年調査）

6　波照間島

波照間島は先島の中の最南端の島である。ここでの念仏は二つある。

一つは旧七月十四日の「ムシャーマ」の行列の最後尾に行われるもので、「無蔵念仏」が歌われる。ムシャーマは豊年祭と盆行事が結びついたような行事で、午前中の旗・弥勒・ブーブサー・ウスデーク・棒術・仮装の行列と午後の豊年祭としての舞台芸能から成り立っている。午前中の行列の最後尾に「ニンブチャー（念仏者）」が付く。ニンブチャーと言っても棒シンカー（棒術）の人と村の役員が二重の輪をつくり、うさぎ跳びのように、腰を低めて回る。内側は右回り、外側は左回りと逆方向に回る。念仏歌は「親の御恩（無蔵念仏）」でだんだん立ち上がるようにして終わる。

二つ目の念仏は翌十五日の夕刻より区長をはじめ村の役員で行う。段ボールで造った仮面やおもちゃ屋で買ってきたような仮面をかぶり、女装を含む異装をして新亡の家を回る。部屋に上がり仏壇の前に座り、「ゴフダイ念仏」を唱える。踊りはない。調査時は段ボールに漫画の「ドラエもん」「秘密のアッコちゃん」を描いたものや「猿の惑星」「辮髪の支那人」「プロレスラー」などの仮面を付けていた。深夜十二時に部落のはずれで「ウークィ（送り）」を行って終わる。

（二〇〇二年・二〇〇四年調査）[12]

三　島エイサー・七月モーイ

沖縄本島の名護以北の各字（あざ）には島エイサーや七月モーイが行われている。島エイサーは旧七月の盆に行われるが、先島のように新亡の家を訪れることはなく、全戸を回る・辻々を回る・新築の家を回る・拝所を回るなどである。盆の送りのあとのカミゴト・めでた事の感覚がある。先島にもその傾向はあったが、さらに強まっている。

七月モーイ・七月デイは女エイサーとされ、輪おどりの形やチジン（太鼓）を叩く、手拭いを手にするなどシヌグ・ウンジャミーやその後に行われるウスデークに似ている。但し曲や踊り方が異なり、念仏歌が入っている。島エイサーとの違いは三線が入るか入らないかであるが、エイサーも古い形は太鼓だけだったようで、違いは男女の別にある。ウスデークは女性のみの踊りである。島エイサー・七月モーイはほとんどの字で行われているので、その数は多く、調査のできた所を記載した[13]。

1　名護市世冨慶（よふけ）

世冨慶は名護の市街地の南端に接する地区である。旧七月十五日の夕刻、各家で盆のウークィ（送り）を済ませてから公民館に八時頃集まり、子供エイサーから始める。子供は鉢巻きをしている。櫓が組まれていて地謡は笠を被ってその中に立ち、大太鼓は抱えて櫓のまわりを回る。チョンダラーがクバ団扇で音頭を取り、男女が櫓の周りを廻りながら踊る。鉢巻きはしない。

最初に「久高万寿」を踊り、氏神の拝所に拝みにいく。再び櫓に戻り踊りを続ける。曲は二十曲ある。「久高万寿」「仲順ながれ」「越来節」「豊年節」「稲しり節」「前田節」ここまでが手踊りで、以降扇子や四つ竹を持つ。「三村節」「花風節」「鳩間節」「今帰仁節」「白保節」「伊舎堂節」「昔蝶節」「谷茶前節」「下ぐり小節」「汀間当節」「ダンク節」「茶売節」「汗水節」「あやぐ節」に載せて退場する。この間休みなく踊る。「仲順ながれ」を「念仏」という。

翌十六日はカミゴトで拝所三ヶ所（オオヌヤマ・アギリューグ・アサギ）を回り、道ジュネーをしながら新築の家を訪れて踊る。世冨慶のエイサーは瀬底から習ったという。

（二〇〇六年調査）

2　名護市城（ぐすく）

城は名護市街の中心部にある。旧七月十三日から十五日にかけて「旧盆エイサー」がある。旗持ちを先頭に三線・

大太鼓一張りで名護十字路近辺の路地を練り歩く。踊りは旗を真ん中に円を描く。道行は「唐船ドーイ」で、踊りは十八曲ある。「仲順ながれ」「テンヨウテンヨウ」「サウエン節（一合二合）」「行っちゅる日」「湊節」「板床ドンドン」「蝶節」「テンヨウテンヨウ（四つ竹）」「南嶽節」「南陽浜千鳥」「色さじーな」「だんじゅかりゆし」「かまやしぬ」「下庫裏小」「ダンク節」「海ぬチンボーラ」「谷茶前」「国東サバクイ」である。「仲順ながれ」を念仏とするが、もう一曲「板床ドンドン」の歌詞に「七月十四日土仏かざして……」があり、「念仏節」とする。[14]

（二〇〇五年調査）

3　名護市屋部（やぶ）

屋部は名護市街地の北に接する。元は七月十五日ウークィ（送り）のあとグショー（後生）を送り出してから行ったが、調査時は十三日・十四日・十五日に行った。十三日はヤーミグィ（家巡り）と言って、新築の家や招いてくれる家をまわり、十四日・十五日はアジマミーグィ（十字路めぐり）といってニーヤ（根屋）を始まりに、部落の辻々を上原から時計回りに十字路ごとに踊る。以前は各家全戸をまわった。

中央に旗を立て円になって踊り、太鼓は置かれている。男女は鉢巻き姿で踊るが、戦前は男子のみであった。男女の手踊りは八月のモー遊びで行った。曲は「打ち出す太鼓」「久高万寿」「ドンドン節」「テンヨー節」「エイサー節」「稲摺節」「越来節」「今帰仁の城」「めでたい節」「鳩間節」「伊計離節」「いちゆび小節」「ヘイヨー（四つ竹）」「なんだけ節」「若夏の訪れ」「砂持ち節」「スライザ」「イマデイスナ節」「海やから節」「雨降らすような」「二合節」「ハイ二才節」「談合節」「仲座」「六角堂」「海のチンボーラ」「スラサエー」「十七八節」「唐船ドーイ」と三十曲ある。「エイサー節」を念仏としている。

「エイサー節」の歌詞「エイサーエイサー七月エイサー　七月七夕七日（なのか）の十日（とうか）　七日の盆に山原（やんばる）にくだりて」はチョ

ンダラー演芸の「口上念仏」の一節である。

（二〇〇五年調査）[15]

4　本部町瀬底島

瀬底島は本部半島東にある島であるが、半島とは橋で繋がっている。旧七月十三日から十五日に「七月エイサー」がある。十三日はウムケー（お迎い）で招かれた家を回る。十四日は二ヵ所の辻を回る。十五日はウークリ（送り）で新築の家を回る。

地方（じかた）は三線と太鼓で、太鼓は締め太鼓で手に持つ。地方は円の中に立ち、その周り二重になって踊る。内側が時計まわりで、外側は反時計まわりで時々うしろずさりしながら踊る。

曲は道行に「唐船ドーイ」、本調子で十六曲、一二上がりで十一曲ある。いずれも流歌で八八八六の短いものに囃子詞が入るのは名護地区と同じである。最初に「二合節」「念仏」「久高万寿」で、曲名は名護地区と重複するものが多く略す。念仏は「山に育ちゃるやまがらし　浜に育ちゃる浜千鳥」である。[16]

（二〇〇六年調査）

5　大宜味村謝名城（じゃなくすく）

謝名城は大宜味村の北部にある。謝名城の豊年祭は隔年に行われる。クランバー（蔵庭）までの道ジュネーとそこでの豊年踊り、ノロ殿地での奉納舞踊、公民館に戻っての夕刻からの舞台がある。その舞台芸能の前に女性だけのエイサーである七月デイ（手）と男女のエイサーが公民館前の庭で、続けて踊られる。

七月デイはは婦人踊りとされ、チジンのみの静かな踊りである。鉢巻きに手拭いを手に持つ。近年ピンクにしているが元は白である。曲は「七月念仏」「たかはなり節」「あさぎぬはなばた」「喜如嘉前ぬ浜」「遊びかいやしが」「よかなよ節」「伊集ぬがまく小」「うみやから」「八重山節」「稲しり節」「いちゃめが里前」「すうりー東」である。「七月念仏」の歌詞の「七月巡らば酒他ぼれ　マドゥに巡れば米たぼれ」の意味は「盆に回った時はお酒をください

普段回った時はお米をください」というチョンダラーの門付けの文句である。

それに続く、謝名城エイサーは三線に大太鼓、チョンダラーの旗振りがいて、にぎやかに踊られる。曲は「テンヨー節」で入場し、「久高万寿」「上がり口説き」「今帰仁ぬ城」「与那節」「港くり節」「三村節」「与那原節」「谷茶前」「スーリーアガリ」と続き、「サイヨー節」で退場する。元は旧八月十日に行われたが現在十月に行っている。豊年祭にエイサー・七月デイが合わさった祭りとなっている。

（二〇一五年調査）

6　国頭村与那

与那は国頭村の中心部辺土名の北にある。与那では旧七月に十三日、盆のウムケーの日の七月モーイ（舞）・盆後の亥の日に行われるウンジャミー（海神祭）・その翌日のウスデークと三つの行事が続く。七月モーイは女エイサーともいわれ、女性だけで踊るエイサーで念仏歌が歌われる。夕刻白鉢巻きに紺の浴衣（昔は芭蕉着）の女性が村の奥のアサギマー（庭）で踊り、続いて下のノロドンチマー（殿内庭）に移り、再びアサギマーで踊る。中央にチジン（太鼓）の叩き手と歌い手が立ち、大きな円を描いて踊る。

曲は十九曲あるが、最初に念仏歌である「七月念仏」が歌われる。これはチョンダラーの門付けの口上に「継母念仏」の一節を合わせたもので、ゆっくりとした曲調で踊られる。踊りは手踊りであるが、ウスデークの踊りの様に手の型が決まっているわけではない。ウスデークとは曲もリズムも異なる。曲は「七月念仏」「黒かしら」「与那節」「赤田門節」「はまなぎ」「スリアガリ」「伊集ぬがまく小」「ハリコーヤマコー」「白木節」「うみやから」「八重山節」「今帰仁ぬ城」「ゆんぬ節」「安波のハンタナベ」「伊舎堂前」「泊高橋」「うるく富城」「テンヨーテンヨー」「久高万寿」である。

（二〇〇五年調査）

7　国頭村宇嘉（うか）

宇嘉は与那のさらに北にある。旧七月十三日のウムケーの日に七月モーを行う。女性達だけの踊りである。アサギマーで一踊りしてから、村の三ヶ所のムトゥヤに行き、それぞれの家の前で輪になって踊る。その後アサギマーに戻り全曲を踊る。曲は与那と重複するものが多い「念仏歌」は「長念仏」で、「継母念仏」系の念仏歌である。踊りは思い思いの服装で鉢巻きはしないが、右手に手拭いをかざしながら踊る。（二〇〇五年調査）

四　エイサーと念仏歌・チョンダラー

以上の事例から念仏を一覧表にすると次の表のようにまとめられる。

八重山

1、登野城	無蔵念仏			
2、竹富島	無蔵念仏	七月念仏（継母念仏）	孝行念仏	大和の山伏
3、小浜島	無蔵念仏	七月念仏（継母念仏）		大和の山伏
4、黒島	無蔵念仏	七月念仏（継母念仏）	孝行念仏	
5、西表島祖納	無蔵念仏			
6、波照間			孝行念仏	

沖縄本島北部（念仏歌とされるもの）

1、世冨慶	仲順流れ
2、城	仲順流れ　板床ドンドン
3、屋部	エイサー節（継母念仏）
4、瀬底	山に育ちゃる
5、名謝城	酒たぼれ
6、与那	酒たぼれ（継母念仏）
7、宇嘉	（継母念仏）

沖縄の念仏信仰は袋中上人に始まるとされ、ニンブチャーもその系譜を引くとされたが、ニンブチャーは近年まで各字にいて葬式時に鉦を叩いて念仏を唱えていた。そのことを記憶している人が多い。しかし袋中上人とニンブチャーを結び付ける史料は少なく、浄土宗の教えはこれとは別に上層部から親孝行などの儒教的な教えを伴って広まったと思われる。八重山には一六五七年（順治十四年）宮良長重が「念仏法」をもって稽古したとある。[18] 一覧表をみても念仏をともなった念仏歌は八重山地区に多い。小浜島の「ミンマン経」は善導の二河白道の教えを歌ったもので浄土教の教えに沿っている。このような浄土教教理による念仏歌は上層部より広められたものであろう。

一方、那覇近郊に行脚（あんぎや）村には京太郎（チョンダラー）がいたとされる。その様子は宮良當壯の『沖縄の人形芝居』に詳しい。京太郎が本土から渡ってきたフトキ（仏）まわしという人形を操る人形遣いで、[20] 先島を含む沖縄を行脚していた。その芸能は沖縄市泡瀬や名護市呉我に残っている。

京太郎の歌は浄土教色・念仏色の強いもので、代表的なものは「継母念仏」である。継母に育てられた子が実の

親を探し求めるという話で「七月念仏」と言われる。「無蔵念仏」は「親の御恩」と言われ親の有難さを説いたもので「父母恩重経（ぶもおんじゅうきょう）」の影響があるとされる。京太郎の歌では「ジョウドシューガムンムンラン（浄土宗の文段）」がそれにあたる。同じように「ジュールシューガブグラン（浄土宗が孝諭）」は「ゴフダイ念仏」「孝行念仏」と言われている念仏歌である。「大和のやまさじ」「園山念仏」とされるのは「大和の山伏」で大和の山伏が沖縄に渡るという話である。「仲順ながれ」は中城村の仲順王の物語で親孝行を試すため我が子を殺し、殺した子を穴にうめようとすると金銀の手箱が掘り出されたという話である。[21] また「酒たぼれ」や「一合二合（二合節）」という口上が念仏歌とされている。このように京太郎の歌や物語が念仏歌とされているものが多い。エイサーに京太郎が道化として登場するのも念仏歌をもたらしたことによるものであろう。

このことは京太郎が広めたというより、村人が京太郎の人形まわしや劇を見て歌にしたもので、歌詞の意味が不明になっているものが多い。沖縄の念仏歌の多くは京太郎の歌や劇の部分を一節として取り入れ、囃しとともに歌ったもので、京太郎の影響は大きい。

注

（1）宜野湾市青年エイサー歴史調査会『増補宜野湾市ノエイサー』榕樹書林、二〇一五年。
（2）小林幸男「エイサーの分類」『エイサー360度』沖縄全島エイサーまつり実行委員会、一九九八年。
（3）伊波普猷「校訂おもろさうし」南島談話会一九二五年（『全集第六巻』平凡社、一九七五年より）。矢野輝雄『沖縄舞踊の歴史』築地書店、一九八八年、六四頁。外間守善校訂『おもろさうし（下）』解説、岩波文庫、二〇〇〇年、四五二頁。
（4）知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹社、一九四四年、二五七頁。
（5）酒井卯作「似せ念仏と八月踊り」『南島研究』三七号、南島研究会、一九九六年。
（6）知名定寛・酒井卯作（前掲書）。

(7) 池宮正治『沖縄の遊行芸―チョンダラーとニンブチャー―』一九九〇年、ひるぎ社。
(8)『折口信夫全集』第一巻、一九五四年、中央公論社。
(9) 狩俣恵一「ユークイの巻き歌」『南島歌謡の研究』一九九九年、瑞木書房、一六五頁。
(10) 崎山毅『蟷螂の斧―竹富島の神髄を求めて―』（一九七二年、錦友堂）によるとウシュマエ（長老）が先頭に立ち仏前で念仏を唱えたとある。
(11) 十六日の昼以降の行事については『小浜島の芸能』二〇〇六年、竹富町教育委員会、及び『竹富町史第三巻　小浜島』二〇一一年竹富町史編集委員会、を参照した。
(12) 以上は映像作品『八重山のアンガマー』三六分（撮影：坂本要・編集整音：春日聡）として、二〇一七年に制作している。
(13) 沖縄本島北部の島エイサー・七月モーイ・ウスデークの報告・研究は小林幸男・小林公江がほとんどを網羅している。この小論もそれらの報告に依拠している。
(14)『エイサー３６０度』（前掲書）二〇六頁では「念仏歌」の歌詞が「山に育ちゃる……」になっていて、配られた歌詞と異なる。歌詞の意味は不明。
(15) 屋部については小林公江・小林幸男「沖縄県名護市屋部の手踊りエイサー」（1）～（4）（『京都女子大学発達教育学部紀要』六号～九号・二〇一〇～一三年）に詳細な記録がある。
(16) 小林幸男「沖縄県名護市名護地区のエイサーと本部町瀬底のエイサー」『関西楽理研究』二七号、関西楽理研究会、二〇一〇年、に名護地区と瀬底の曲名比較が掲載されている。また、酒井正子「沖縄「手踊りエイサー」に見る掛け歌の諸相」（『歌の起源を探る　歌垣』三弥生書店、二〇〇一年）も参照。
(17) 小林幸男・小林公江「女エイサーの音楽（1）」、『沖縄芸術の科学』二一号、沖縄芸術大学、二〇〇九年。
(18) 新城敏男「宗教（2）仏教の伝播と信仰」、『八重山の社会と文化』、木耳社、一九七三年。
(19) 宮良當壮『沖縄の人形芝居』郷土研究社、一九二五年（『全集　十二』、第一書房、一九八〇年）。
(20) 田場由美雄は「沖縄のニンブチャー・チョンダラー」で、チョンダラーの木偶まわしを大分県宇佐八幡の院内地区に求めている。（『漂泊する眼差し』、新曜社、一九九二年）。
(21) 言葉や物語の内容は宮良當壮（前掲書）や池宮正治（前掲書）による。